

感性の変革の前で佇む男——「道草」論

序 「道草」論の前提

「道草」は、一九一五（大正四）年六月三日から九月一四日まで、全百二回にわたって、東京・大阪の両「朝日新聞」に掲載され、同年十月、岩波書店より刊行された。漱石の実生活を素材とした一種の自伝的な長編小説であった。しかし、養父島田を中心とする肉親縁者と健三との関係を縦軸とし、健三、お住夫婦の対立・葛藤を横軸とする日常生活のドラマであるこの小説は、狭い私小説的な枠をはるかに超えた豊かな思想性を持っていた。

健三は、「生きてゐるうちに何か為終せる、又仕終せなければならぬ」と考へる（二二一）強い使命感に燃えた洋行帰りの知識人であった。道義的な個人主義者でもある健三は普遍、真理、理念という「知」の世界に生き、そこに自分の生きる意味、価値、幸福、生きがいの基礎をおいている男であった。しかし、「道草」においてこの男は、生活者、日常人としての無能力性、頼りなさをさらしているだけでなく、理不尽な女性への差別と偏見をもち、また、人間としての人格の欠陥性が完膚なきまでに暴かれ、道義的な個人主義などとても担えない洋行帰りの知識人として語られている。

なるほど、健三のこの知的優位性の失墜——〈普通の人間〉の「自己発見」——は、対立・葛藤を繰り返す夫婦内での健三の地盤沈下をもたらし、その限りで夫婦の危機を緩和し、一種の安定をもたらししている。しかし、この〈普通の人間〉の「自己発見」は、指摘するまでもなく健三のこれまでのアイデンティティの危機のドラマを内包していたのだった。実際、島田の登場という縦軸は、〈過去〉と断絶して暮らして来た健三をして「血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならぬ」（二二四）い状況をつくりだし、また、お住との夫婦の対立・葛藤という横軸は、家の〈内〉から男、夫、父としての健三の存在を問うことで、いわば、「家」の〈内〉〈外〉から「生きてゐるうちに何か為終せる、又仕終せなければならぬ」と考へる（二二二）知識人健三のアイデンティティそのものを脅かし、自分は何のために、どうして生まれて来たのであろう、どこから来て、どこへ行くのだらうという深い存在論的懐疑、空虚を抱え込むという状況を一方で発生させていたのだった。

一体、健三は、「血と肉」で構成された〈家〉の世界を嫌悪し、またモノ化されることを厭ってなるべく「眼に見えるもの」（九十八）としての「役に立つ」（九十二）「手腕」（七十七）有用の世界、「金持」（五十七）の世界と無縁であろうとして「学問」（二十九）〓〈普遍〉の道を選択した男であった。しかし、それらの世界から絶縁して生きようとした彼の「学問」〓〈普遍〉の世界は、後で詳しく述べるが、「偉くなる」（五十七）〓〈名譽〉〈地位〉という立身出世主義の構造の埒内にあった。皮肉にも、「学問」の世界に生きるこの男を囲い込んでいたのは「学問」〓〈普遍〉を「金」に換算する世界であり、事実、健三は、「金」が人間関係を新しく再構成する近代資本主義社会の流動にすっかり身体をからめとられていた。小説「道草」は、健三のこうした意図と現実の乖離現象を鋭くえぐりだ

すことで、これまでの自己のアイデンティティそのものを根源的に問わなければならない地平へと健三をつれ出している。たしかに、養父事件は一応決着し、夫婦の危機は回避したかに見える。しかし、妻の明るさに較べて健三は「頹廃の影」「凋落の色」(二十四)を帯びて限りなく暗い。最終部での健三の「吐き出す様に苦々しかつた」言葉は、事件がすっかり片付いたと思う妻の軽薄にたいする健三の深謀遠慮の言葉にちがいない。しかし、その「苦々し」さの背後には養父の登場によつて健三が新しく抱え込まれてしまったアイデンティティの危機の問題が隠されていたのだった。

1 養父の登場——健三の過去

「道草」は、健三の前に養父島田が登場することでドラマが始まり、その島田が舞台から消えることで終わる。

冒頭はこうなっている。

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に所帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身体には新らしく後で見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。

彼は斯うした気分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二

返つゝ規則のやうに往来した。(二)

健三は、「遠い国の臭」(二)を「忌」(同)みながらもまだ「見捨て」(同)たわけではなく、むしろ「其臭のうちに潜んでゐる」(同)「誇りと満足には却つて気が付か」(同)ない男としてまず登場する。そして、この「遠い所」⇨「外国」から帰つて来て「駒込の奥」(同)に所帯を持つた健三は、梅雨時のある日、偶然、「十五年」(同)も会うことのなかつた「帽子を被らない男」(三)⇨「養父と出会い、過去の世界へ連れ戻されていくのである」。

健三は三歳から八歳まで島田の養育を受けた。しかし、そこで生きた時の「心」(十五)の状態がどうであつたか健三には不明であり、「日付がついてゐな」(十九)い風景ばかりであつた。要するにそこには自分がいないのだ。その後、健三は実家に引き取られ、二十歳の時、正式に復籍、養父との戸籍上、あるいは金銭上の問題は解決済みとなつた。しかし、養家と実家の二つの「家」をボールのように投げ渡された健三は、はじめから自分がどこに帰属するのかわからない存在の曖昧さを抱え込まれた少年であつた。「実家へ引き取られた遠い昔」(九十二)の思い出は、「一個の邪魔物」(同)扱いされた苦い記憶しかなく、実際、すでに「生の父に対する健三の愛情を、根こそぎにして枯らしつゝ」(同)されていた。その頃の健三は、「健三は海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。両方から突き返されて、両方の間をまごまごしてゐた。同時に海のものも食ひ、時には山のものにも手を出した」(同)という具合であつた。まさに健三は「人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。たゞ実父が我楽多として彼を取り扱つたのに対して、養父には今に何かの役に立て、遣らうといふ目算がある丈であつた」(同)。健三は自己の帰属する場所を持たなかつた。健三にとつて「家」あるいは

「父」なるものは嫌悪の対象でしかなかった。

ところで、帰属する場所を喪失した少年が唯一生きられる空間が学問であった。かつて養父は健三を打算的に考え、「給仕」でもやらせようとしていた。幼い健三は、「給仕になんぞされては大変だ」(九十二)と思い、「立派な人間になつて世間に出なければならぬ」という欲(同)を持った。学問して「立派な人間」になること、これが健三が健三であるための存在の根拠となつた。「黒い髭を生して山高帽を被つた」(二〇八)の健三のアイデンティティの原点である。

「家」の庇護、愛情から投げ出されて帰属する場所を失つた健三を救つたのは立身出世を構造化した明治の国家であった。国家は、帰属する場所を失つて浮遊する個を学問、教育の機関を提供することで立身出世のイデオロギーのもとへと見事に包み込んだのであつた。概ね立身出世のイデオロギーは、士族の身分を失つて方向性を持たずにいた武家の子息を「家」の復興という名目で新しい国家に吸収する機能を果たした。そこでの立身出世主義の構造は、〈自分―家―国家〉の三位一体によって構成されてきた。ところが、健三の場合は、身分というより家そのものから排除されており、〈自己―国家〉として、この個は直接国家と結びついてきた。健三は、家の束縛を受けることなく国家と結びつくことで、家の縛りからは比較的自由であり、その分、健三は、主体的に国家と結び付いてきた。そこに健三の自我の近代性があつた。しかし、立身出世のイデオロギーに媒介されたこの近代的な上昇的自我は、国家の存在を前提とすることによってのみかろうじて容認された自我でしなく、それだけ国家の内に拘束された自我でもあつた。とりわけ、健三の上昇的な自我は、幼年期の家への帰属感の空白を学問で埋めた分、国家と「学問」との癒着度が強かつたばかりか、「不幸な過去」との絶縁、あるいはそこから遁走した分、過去の時間から常に追いつてをくう不安定さともろさを人一倍抱えていた。

養父との金銭上、あるいは契約上の問題は実父によってすでに処理されていた。したがって、常識のレベルで言えば、健三は養父島田の「眼付」(二〇)に「脅」(二二)えることなど何もなかった。実際、妻お住もそう思っていた。もちろん、島田が登場した以上、お住にとつて他人事ではなく、養父はいわば共同の敵の登場という意味をもつ。したがって、それは、夫婦の危機打開の一つともなりえる性質のものであつた。しかし、健三はこの問題を妻に相談することもなく、自分一人その登場に脅え、体調を崩すほどの不安に晒される。健三は養父の登場によって忘却の彼方へと消したはずの空白の過去に一人直面していたのだ。根源的な生の領域において健三の過去の時間は、何の解決もされていなかった。養父の登場は、そうした健三の生、あるいはアイデンティティのアキレス腱を衝く恰好で迫つて来たのである。繰り返せば、養父島田は「不幸な過去を遠くから呼び起す媒介」(二二)者となつて健三の「いま」の「誇りと満足」(二二)を奪う魔物として、それこそ、片付いたと思つてきた「過去」が片付かないものとして突如〈今〉の健三の世界に侵入してきたのであつた。こうして、養父の登場は、「過去」を忌み、その「世界から独り脱け出し」(二十九)た健三の生、あるいはアイデンティティの危機のはじまりであつた。灸田和夫が、「道草」論(「作品」第二号、74・5)の中で、「道草」は、「漱石の〈存在の原拠〉を明らかにする、まるごとの〈消えぬ過去〉の物語」そのものである」とし「実存的作家としての漱石」を問題にする所以である。

ところで、健三は会うことを「嫌悪」(十三)しながら、会わないことは「正しい方法」(十一)ではないとして養父と面接していく。お住は、ずるずると養父との関係を続ける健三に頼りない夫の優柔不断さを感じるが、健三は昔「世話になつた」(十三)という「義理」(同)の意識に強く絡まれてい

たからであつた。そこには見捨ててきたという罪の意識も働いていた。ただ、お住は、「魔物」と面接している健三の劇は知る由もなかつた。

養父との関係を自力で処理できなかった健三は、普段から親戚づきあいを余りしていない姉と会うことで、疎遠にしていた親戚縁者との関係を持つ。妻との相談という通常の手続きを忘れたこの行為は、かつて家という制度を嫌悪し、そこから脱出した（見捨ててきた）はずの世界へと回帰していくということであつた。健三は、まさに思考の内から排除してきた空白の「過去」と面接し、しだいに「血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならぬ」（二十四）い状況へと自ら入つて行つたのであつた。そして、この健三における「血と肉と歴史とで結び付けられた」親戚縁者との関係への回帰は、大学と書斎の空間を往來していただだけの知識人健三の狭い視野を飛躍的に拡大し、自己相対化へと向けて行くことになる。家秩序の中の健三は、姉兄に対する弟、義兄に対する義弟、義父に対する義息、義弟に対する義兄、養父母にたいする義子というように関係ははつきりしている。そして、その関係を通して見えて来たのは、「変人」（三三）、横柄、空っぽの理屈屋としての自分の位置であり、また、自分がこれら親戚の中で金づるの「心棒」（三十三）として機能している実態であつた。そこにあるのはたかり、たかられるという金と金の関係でしかない構造であつた。健三はそうした関係を嫌悪しながらも、はた目を気にして「義理」の中に生き、偏狭な自尊心を捨てることも出来ないし、金が万能だとは思わないものの、金のないことを卑下し、「金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入つて来るにはまだ大分間がある」（五十七）る男として生きていく。だが、こうした日常での自己の行為・位置を冷静に眺める時、健三はしだいに自己を特別な人間と思う自負の念を失つていった。健三もまたサラリー（金）の中で生きる一人でしかなかつた。

神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強欲な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ気が強くした。（四十八）

「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した変りはないんだ」

平生の彼は教育の力を信じ過ぎてゐた。今の彼は其教育の力で何うする事も出来ない野性的な自分の存在を明かに認めた。斯く事実の上にて突然人間を平等に視た彼は、不憚から軽蔑してゐた姉に対して多少極りの悪い思ひをしなければならなかつた。（六十七）

「家」という日常のフィルターを通して自己を眺めるにつれて健三は「優者」（六十）の自信を失ひに失つて行つた。とりわけ、係累の貧困、老い、病、つまりは都市の「家」の解体する風景を目撃するにつれて、「人格」（七十二）「個人の徳」（七十七）を口にし、「学問」一筋に生きる自分の生き方に疑問を覚え、「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」（二十九）という意識さえ芽生えてくる。健三のアイデンティティを支えていた学問と教育と価値、幸福、生きがいの幻想（図式）がしだいに剝がされていく。

健三の調子は半ば弁解的であつた。半ば自嘲的であつた。過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、其現在の自分の上には是非共未来の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。さうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれども其方針によつて

前へ進んで行くのが、此時の彼には徒らに老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち来さないやうに見えた。(二十九)

知識人健三のノートの字は「蠅の頭位であつた字が次第に蟻の頭程に縮まつて来」(八十四)で、最終的には「御前は必竟何をしに世の中に生れてきたのだ」(九十七)という懷疑へと發展していくのである。語り手は、学問、書齋に生きる自己の世界が相対化され、ただ「徒らに老ゆる」だけの自己を発見する健三を「気の毒なもの」(九十一)と同情的に語っているが、養父の登場によつて健三はこの地平まで引きずり出されていたのであつた。

2 妻との対立・葛藤のへ根

健三は「生きてゐるうちに何か為終せる、又仕終せなければならぬと考える男であつた」(二十)。その結果、健三は、「仕事をするよりも、しなればならないといふ刺激の方」(二)に「遙に強く彼を支配」(同)され、いつも「いら／＼し」(同)「神経衰弱」(同)に陥っていた。健三は語り手が語るように、「彼の心は殆ど余裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。(略)さうして自分の時間に対する態度が、恰も守銭奴のそれに似通つてゐる事には、丸で気がつかなかつた」(三)男であつた。もちろん、「彼は臆氣にその淋しさを感じる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。だから索漠たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それを却て本来だとばかり心得てゐた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた」(三)のであつた。つまりは健三とは生まれて来たからには「何か意味のある仕事」「仕終せなければならぬ」という強い知識人の使命感につき動かされた男であり、たとえ「温かい人間の血を枯ら」す禁欲を強いようともやり抜かなければならないと意志する人間であつた。いわば健三の関心は、学問上の普遍、真理、観念の方に開かれており、そのことに何のやましさもなく、かえつて自信と誇りさえ感じていた。結果として健三は日常の付き合ひ、遊び、金の問題に何の価値も意義も見い出せず、事実、疎かつた。いわば、健三は、学問という抽象、観念の世界の住人であり、したがつて、健三は、家庭の妻、子供、生計について全く顧みない人間でもあつた。そして、こうした「学問」は仕事人間がしばしば妻の予想もしなかつた反撃、反乱の仕打ちにあうのはすでに日本の家庭史の示す通りである。お住は、「家」の内の育児や台所に封印された女であつた。

不思議にも学問した健三の方が此点に於て却つて旧式であつた。自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義を實現したがりがながら、夫の為にのみ存在する妻を最初から仮定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此所にあつた。

夫と独立した自己の存在を主張しやうとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。(七十二)

健三にとつて妻とは「夫の為にのみ存在する」「従属」物であつた。女の人権を無視するこの健三

にお住が「男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感」(七十)を持つのは当然であった。健三とお住の対立・葛藤の根はまずこの「夫と独立した自己の存在を主張」することを「不快」に思う健三の女性蔑視の感性であった。語り手は、そういう健三を「頭力で抑へつけたがる男」(十)、「彼の道徳は何時でも自分に始まった。さうして自己に終るぎりであった」(五十七)と正当に批判している。しかし、他方で、お住を「夫を打ち解けさせる天分も技量も自分に十分具へてゐないといふ事実には全く無頓着」(十四)で、「理知に富んだ性質ではな」(六十五)く、いたずらに「眼に見えるもの」(九十八)「手腕」(七十七)を大切にする女として裁いている。たしかに、ここには、健三は「教育が違ふんだから仕方がない」(三)と横柄に構え、お住は「手前味噌よ」(同)「大風呂敷」(同)としてののしるという和解しようのない夫婦の構図がある。語り手は、「二人共自分の有つてある欠点の大部分には決して気が付かな」(七十三)い「陳腐」(十八)な夫婦だと批評している。

それにしても、一見、「神の眼」のような語り手の公平なこうした裁きは果たして正しい裁きになつているのであるうか。ここにあるのは、「自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義」^義「自己本位」^義個人主義を標榜しながら、しかし、「夫と独立した」女の「存在」を認めない男のただの暴力的な「身勝手」さではないか。妻は健三の言っていること^義「観念」とやっていること^義「感性」の矛盾に気付き、その偽善性を衝くことで「尊敬を受けたければ、受けられる丈の実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い。夫といふ肩書などは無くとも構はないから」(七十一)と言っているので、おおよそ妻お住の「夫を打ち解けさせる天分も技量」もあるいは「理知に富んだ性質」も、そしてまた「手腕」(七十七)を大切にする価値観も無関係ではないか。

健三は自分がやっている「学問」を最高の価値として他を下位に序列化し、その意識をさしてあやしむこともなく生きている男であった。お住は、夫の仕事^義「学問」に理解がなかつたわけではない。もちろん中身には精通してはいまい。ただ、自分と直接毎日接する局面で見せる夫の妻への差別的、暴力的な感性がたまらなく嫌であったのだ。したがって、いくら健三から夫を和ませる「天分」^量を要求されても、また、「理知」の必要を説かれ、価値観の貧しさを突かれたとしても素直になれず、すべてを庇理屈としてしか受け止めようとしなかつたのであった。

ところで、自分がやっている仕事^義「学問」を絶対的な価値とする健三はお住に対してのみ差別的、暴力的に対応していたわけではない。例えばお住の父にもそうであつたらう。妻がたまらなくなるのは当然であつた。なるほど、お住には、目に見えるもの^義「手腕」、金で男を評価する皮相なところがあり、それが、目に見えない「人格」や「徳」に重きを置き、はたまた偽善的な「義理」に縛られて揺れ動く健三への不満、不平ともなつていた。しかし、自分の父を「尊敬」するお住の心理の背後には、自分の父を下位として序列化されたお住の反抗心が介在していたのであつた。健三・お住夫婦においてまず問題であつたのは、「学問」を絶対的な価値とする健三の価値意識と他者(女)の「存在」を容認しない人権性の欠如という事態であつた。健三の差別的、暴力的な価値観・感性が夫婦の対立・葛藤の直接の原因であつた。妻お住の批判はすべてそこに向かつて投げかけられていた。しかし、健三はこうした妻の批判を受信する能力がなく、しぶとい、形式張った女、「技巧」(九)する女として退け、そこに父親の陰を嗅ぎつけてきたのであつた。灸田和夫は前出論文において、お住を「功利的、皮相的現実主義にからめとられた」女として、「ひとり健三のみが、己れの自立を賭して、内発的に近代を骨肉化していくのである」と評価しているが、かなり偏狭な語り手サイドに立ち過ぎた評価だと言える。しかし、確認しておけば、このいささか健三に甘い語り手の偏狭さもやがて克服されてい

くことになる。

然し起きて膳に向つた時、彼には微かな寒気が背筋を上から下へ伝はつて行くやうな感じがあつた。その後で激しい嘔が二つほど出た。傍にゐた細君は黙つてゐた。健三は何も云はなかつたが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に対する厭な心持を意識しつゝ、箸を取つた。細君の方ではまた夫が何故自分に何もかも隔意なく話して、能動的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却て不愉快に思つた。(九)

さて、ここにあるのは、奪い合う愛である。この夫婦の対立・葛藤の根っこには、どのようなかたちで人間関係を作り上げて来たかの感性の問題が介在していた。新しい人間関係を結びあつた二人であるが、その人間関係の取り方は、それ以前の人間関係のありように多く規定されている。健三は基本的に、人間を猜疑の眼で見ることができない不感性感性を背負つていた。「比較的自由的な空気を呼吸(七十二)して育ち、夫への従属を喜ぶ女など「今時そんな女が何所の国にゐるもんですか」(七十二)となる「存外新しい点」(七十二)を持つたお住もまた愛情は与えられるものと決めてかかつているところがあつた。

ここで、まず問題にしたいのは、言葉の介在しない身体反応から何をしてほしいか読み取れ、それが愛情の深さだとする恐ろしいほどの健三の愛情乞食性(暴力性)である。人に愛情を注ぐのではなく、たえず他者から愛情を奪おうとする性癖の所有者こそ健三という男であつた。彼は、たえず他者に猜疑心の目を向け、他者を自己の歪んだ眼でしか捉えられない。自分だけに無条件に愛を注ぐことを求める幼児的で、それだけにひどく暴力的な愛情乞食的な自我が、他者を容認しない差別的、暴力的な健三の価値観・感性の背後にあつた。そして、結論的に言えば、この自我こそ夫婦の対立・葛藤の根であつた。健三が他者としてのお住を発見できず、その認識の枠を壊せなかつたのは当然のことでもあつた。ここでは、せいぜい自分も悪いがお前も悪い、だから一緒に変わらうという程度のもので、自分自らまず変わるといふ意識がつかぬほどでもない。実は、「道草」の夫婦の葛藤劇が終焉の兆しが見えないのは、手放そうとしない健三のこうした他者(お住)を容認しない幼児的(自我)のためであつた。自分への愛を求める妻は、夫への愛の献身のみを求める健三の幼児的自我に向けて絶えず抗議の信号を送つていた。ヒステリーはその一つでもあつた。たしかにその時は、即物的な同情から「慈愛」(七十八)の心が健三に兆すこともあつた。また、生む性の自然性によつてお住を容認する時(七十九)もあつた。

しかし、健三は、愛情乞食たる自己の幼児的な(自我)こそまず優先的に変革するほかないという境地へと進むことはなかつた。「道草」において神や自然がしばしば語られるが、それは神や自然に救いを求めなければならぬほど、健三の自我が変わることを拒否してゐたからである。「道草」の健三は、神や自然の要請に先立つてまず自分が変わる、こと、そうすることによつて世界(他者)お住が変わるのだという単純な真理を得ることができないようにしようもない男として語られている。健三の幼児期の「不幸な過去」が、このどうしようもない自我を生成してゐたのであつた。

健三、お住夫婦の対立・葛藤の根は、家(日常)の中の知識人(健三、生活者)お住という構図にあつたわけでも、また、健三が「徳」をベースとする人間関係に価値を求めているのに、お住が「手腕」「金」という「眼に見えるもの」に価値をおいているという価値観の対立にあつたわけでもな

かった。ひとえに妻にのみ愛の献身を要求する健三の愛情乞食的ないびつな自我こそ対立の根本理由であった。ところが、健三は、自己を姉や養父と同じ地平で発見（相対化）したものの、最も近き他者としてのお住を容認できない愛情乞食的自我克服の必要性について深く自覚することもなかった。

3 変貌するお住——妻の愛想づかし

お住の方はどうなのであろうか。お住は、女の人権を求める〈新しい女〉ではあったが、しかし、「夫の権利を認める女」(十四)であり、無神経で軽薄なただ飛んでいるだけの女であったわけではない。健三の愛情乞食的な〈自我〉に直面してヒステリー症状を起こすほどに神経質な面を持つ女であった。この点については、渡辺澄子は、「道草」論（大東文化大学紀要」第29号、91・3）において、お住の「被害者」性を捉え、幼年期の「運命的出生の不幸」からくる「歪んだ女性観、素直にひとの好意を受容できぬ性情を植えつけられた健三の不幸」を的確に指摘している。

ところで、健三が「彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとすならずにある兄の事があつた。喘息で斃れやうとして未だ斃れずにいる姉の事があつた。新らしい位地が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。其他島田の事もお常の事もあつた。さうして自分と是等の人々との関係が皆なまだ片付かずにあるという事もあつた。」(八二)として「片付か」なさを口にしはじめる頃から、お住もまた「片付か」ぬ問題として健三を捉え、静かな愛想づかしを始めている。夫の一つ一つの言動に矛盾、偽善、横暴を嗅ぎとり、神経質に対応していたお住は逸速く、「夫の言葉を戯談半分に聴いてゐられるやうになつ」(八二二)ていた。愛のみを求めない

心のゆとり断念、敗北、諦めが生まれたためであった。単に三人の子供の母になった余裕からそうなったわけではなかった。お住は、書斎（健三だけの私空間）に入る健三に嫉妬を燃やすこともなく、女と母とを逸速く分離することで〈家〉の内側での妻のスタンスを獲得し、ゆとりをもって子供との世界を共有していくのである。そして、そのお住は、遠慮することなく、あなたは「女房や子供に対する場合が欠けてゐる」(八十三)といい、「僻んだ眼」(九十八)を持つ健三をストレートに批判するようになる。健三はいよいよ自分が見えなくなり、「段々くんがらかつて来」(同)る。お住の言葉が健三の自我の根底——愛情乞食性を衝き、健三という人間の全体に揺さぶりをかけたからであった。実際、健三は幼時の愛情乞食的な自我をそのまま継続してきた人間であり、「家」という機構が要求する役割さえ十分果していない男であった。

健三は〈家〉を中心として見た場合、様々な顔（ペルソナ）をもっている。妻に対する夫、子供に対する父、養父母に対する養子（独りっ子）、実父に対する息子（三男）、姉兄に対する弟、比田に対する義弟、妻の父に対する義理の息子、そして社会的には大学で講義する学者、先生という顔である。しかし、「道草」全編を通じて感じるこの男の印象では、子供に対する父としての意識の希薄あるいは薄情さであろう。夫としての権力意識の突出に較べれば異常とも思われる父Ⅱ保護者意識の希薄さこそ、健三という一人の人間の特性をよく象徴している。この男の不幸な幼少体験、つまり、標準的な父のモデルの喪失体験が本能的に〈父〉であることへの生理的な嫌悪感なり、とまどいの感覚を作り出していた。健三には一家の長としての責任感なり、倫理観が決定的に欠落しているのであり、彼が家計の苦しさを妻から訴えられ過度に働くのは男性意識からであって、いい意味での父性性からではない。この男にとって機能・役割としての父性性（夫）は未分化なのであり、だからこそ、

養父島田の登場に際して、まず妻に告げることもなく、いそいそと姉に相談に行くという不自然さを不自然とも思わず実行してしまつたのであつた。妻お住は、夫、男としての論理の横暴さにだけ不満があつたわけではない。

お住は、「家」の父としての役割意識希薄な健三と異なり、妻として、母として「家」の役割を引き受ける女へと変貌していく。お住はそつと健三の財布に金をしのばせる配慮をみせ、また、実父の零落を恥じることもなく、健三の古いオーパーを寒いよりはましと父にあげたりもする。お住は、父を絶対化して生きていたわけではなかつたし、また、「外部ばかり飾つて生きてゐる人間」(九十八)でもなかつた。ともかく、それが余儀なくされた結果だとしても、そしてまたそれが良妻賢母イデオロギーの内面化であつたとしても、さらにそれが家制度を容認することで家の内側での権力をめざす女の哀しい(立身出世)版であつたとしても、お住は愛の対象としてのみ健三を眺めるのではなく、ある種のスタンスを持つて眺められる女に変貌していたのであつた。

断つておけば、この夫婦は憎悪の言葉をたがいにおつて罵りあつてばかりいたわけではない。多くはたがいのモノログでもあつたわけで、語り手の解釈をそのまま健三、お住とする短絡は避けた。たしかに、お住は「父を何かにつけて標準に置きたがる」(八十四)女であつた。健三は、そのため「金」「手腕」の価値観に揺さぶられたりもした。しかし、健三にはお住の父へのコンプレックスがまずあり、そのコンプレックスのため、健三が必要以上にお住の父を下位として序列化したためお住が心理的対抗上、実父を持ち上げるといふ事情が介在してもいた。実際、お住の父の没落につれて、健三に義父への心理的なゆとりが生まれているし、また、幼年期の健三の不幸な生い立ちを知るに連れて、お住にも健三への同情が生まれているといふ事情も認められる。その限りで夫婦の対立・葛藤

を単純に絶望視するのは誤つてい^る。

「安心するかね」

「え、安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。「お、好い子だ。御父さまの仰しやる事は何かちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ、幾度か赤い頬に接吻した。(百二)

これは有名な「道草」最後の健三・お住夫婦の会話である。妻は「すつかり片付いちやつた」と思うが、健三は、「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」とつぶやいている。たしかに、養父に百円贈与することで、養父との関係についてはけりがついたわけだから「片付い」というお住

は誤っていない。ただ、相手のあることだからいつ何時、「色々な形」に変わって現れるやもしれず、その限りでは健三の言い分が当たっていないわけでもない。しかし、ここでの問題はそんな事の正否ではなく、お住の明るい落ち着きに対し健三の暗いいらした振る舞いの対照性であろう。ここでは、養父事件にどう本人らがかかわったかの関わり方の違いが認識・振る舞いの差となって表面化しているのである。お住は養父事件を通してどうしようもない健三が見えて来たのであり、一種の諦め、愛想づかしから逸速く女と母の分離を成し遂げ、妻としてのスタンスを確立したのであり、家の内側でのヘゲモニーを獲得した女であった。そして、そのお住は、いささか余裕をもって、あたかも幼児を母がいたわるやさしさをもって「御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」と場面を生き生きと生きているのであり、しかし、健三は全く対照的で、夫の威厳を取り繕いながら場面を憂鬱に生きている。養父事件は健三にとって失ったもの、背負ったものの方が大きく、お住のようにたしかな生きるメソッドを持つことができなかつたのであつた。

4 日本の近代に佇む男——あるいは「片付かなさ」の問題

「遠い所から帰つて来て駒込の奥に所帯を持つた」健三は、養父の登場によって改めて親類縁者との対応にも直面した。しかし、結論的に言えば、健三はこれらの他者なるものとうまく関係がとれず、「皆なまだ片付かずにある」という状態であつた。例えば、養父との関係で言えば、一応、金で解決されてはいる。「義理」と「徳」の人間関係で揺れた健三は一応「金の力」(百二)でその「面倒」(同)な関係に終止符を打つただけであつた。養父との対立関係も一応「金の力」で「義理」を果し

ただけであつた。そこには、いずれも「好意」(百二)で「己は精一杯の事はしたのだ」(七十五)という自己満足はあつても、本当の人間関係はまだ「片付か」ないままであつた。養母のお常にしても、金をちびちびやるだけで、「善人」(六十三)でないため「零落した昔の養ひ親を引き取つて遣る事も出来」(同)ずにいる。要するに、「金の力」で「義理」を果しているにすぎず、そこにはどんな意味でも「人格」「徳」のネットワークなど一つも作り出せていない。それどころか、「金の力」ではどうすることも出来ない肝心な妻との対立・葛藤もまだ「片付か」ないままであつた。はつきりしていることは自分が彼らによって金づるとされているということであつた。

しかし、「片付か」なさの最大のもは、煮え切らない中途半端性(軽薄さと偽善性)を一貫して抱えている健三その人の思想、自我、感性であつた。健三は、すべての面で二極に引き裂かれた状態で生きている。「金」や「手腕」や「実用」を嫌悪しながら、「人格」「徳」「自己本位」の原理を一貫することができず「義理」と癒着し、女性の「人格」「徳」、「自己本位」||人権を容認することができず、女性への差別意識を強固に抱え込んでいた。お住は、健三のこうした中途半端性からくる矛盾、偽善の言動を日常性の地平で見詰めた唯一の目撃者であり、また、最も傷付いた犠牲者であり、抗議者であつた。

それにしても、こうした健三の思想、自我、感性の中途半端性は、はじめから語り手の仕組んでいたものではあつた。語り手は、はじめから健三を「金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入つて来るにはまだ大分間があ」(五十七)る男として登場させていたからである。もちろん、「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」とは何か、語り手ははつきり語っているわけではない。ただ、それが、「眼に見えるもの」||金、モノの世界を越えた人間のやさしき、愛、信頼によって構成され

た世界を漠然とさしているだろうと想像することができ。しかし、この世界の構成のためには、何よりもまず、近代日本人全体が犯されている〈病〉——一国内でしか通用しない上昇的自我（幸福感）の呪縛から解放され、少なくとも垂直の価値意識から水平の価値意識へと転ずる必要があった。それぞれの文脈、コードを持つて生きる他者の容認である。

帰属する場所を失った健三は、立身出世、上昇することを是（価値、幸福、生きがい）とする国家の価値観の内に生きるほかなかった人間であった。皮肉なことに、この立身出世⇨上昇することを是とする国家の価値観は、健三の反発する「金」「手腕」〈実用〉の世界を価値、幸福、生きがいの世界として容認していた。したがって、健三がいくら「金」「手腕」〈実用〉を是とする価値観への対抗として「人格」「徳」〈自己本位〉の価値観を対置したとしても、肝心の立身出世⇨上昇することを是（幸福）とする国家の価値観（上昇的自我・幸福観）を根本的に変革しない限り、いつまでたつても「金」「手腕」〈実用〉を是とする価値観を突き崩すことなどできるはずがなかったのである。「道草」の健三が、〈近代〉の「実質」の世界に「大分間」があつて行けず、「途中で引懸つて」（九十七）いる男として「道草」の中にあつたのは当然であった。たしかに、健三は、洋行帰りの「誇りと満足」は「見捨て」たようだ。その限りで、もはや「黒い髭を生して山高帽を被つた」自信に満ちた健三はそこにはいない。もちろん、その「誇りと満足」の背後にある上昇的自我と生来的な幼児的自我は、「見捨て」るまでにはいたっていない。しかし、上昇的自我と幼児的自我の動揺があり、事実、それ故に、健三は深い存在論的懐疑と虚無を抱えて佇む男として作中にあつたことは否定できないのである。そして、「道草」において特に注目しなければならぬことは、島田を通して浮上することになつたこの健三の〈存在論的懐疑と虚無〉⇨空虚という事態なのだ。なるほど、ここで、健三の空虚を

日本の未成熟な近代の状況との関係でアナロジックに捉え、説明することができよう。過去を喪失した日本の近代の空虚、西洋と東洋の文化の狭間の中でその感性、自我、身体を引き裂かれ宙ぶりの状態の中にある空虚、目指すべき西洋近代に到達できず、「片付か」なさを抱えて道草をくつている空虚といった具合にである。しかし、健三が「道草」で直面している空虚とは、〈先進→後進〉⇨進んだ意識→遅れた意識の図式の中で捉えられるものでも、あるいは〈知識人→民衆〉の図式の中で解決されるような性質のものでもなかった。健三は自他未分の幼児的自我を引きずり、しかも一国内でしか通用しない日本近代固有の上昇的自我に呪縛されて道草をくい、佇んでいたのであった。

「道草」の作者漱石は、すぐには妻には了解されぬこういう孤独・課題を背負つた近代日本人として健三という男を語つた。この男の背負つた存在論的懐疑と虚無⇨空虚を通して日本的アイデンティティ、その価値観と感性の変革、転換の必要性を示したのである。

注1 この男の物語を、例えば、江藤淳は、すでに、「道草——日常生活と思想」（『三田文学』56・8）の中で、「この小説の過程は、知的並びに倫理的優越者であると信じていた健三が、実は自らの軽蔑の対象である他人と同一の平面に立っているにすぎないことを知る幻滅の過程である」とした上で、「ここに『主題』は、漱石の成功作がしばしばそうであったように、「自己発見」の主題である」とし、また、立場の異なる伊豆利彦は、「漱石と天皇制」89・9、有精堂）の中で、「彼が、彼の批判し軽蔑している人々と実は同質の人間なのだということをあきらかにした作品『道草』の意味を強調したい」としていずれも〈普通の人間〉になる物語としている。

注2 この点については、「唯一の外交的解決策」（江藤淳、前出）あるいは、自然の「非情な平等性」の発見（柄谷行人「意識と自然——漱石試論」〈『群像』69・6、「畏怖する人間」79・4、冬樹社）という指摘がある。

注3 この点については、小澤勝美が『透谷と漱石——自由と民権の文学』（91・6、双文社出版）の中で、健三と

他者との関係を〈断絶〉だけで読むのではなく、その〈断絶〉の底にある愛の賛歌を読みとる必要をすでに指摘している。

注4 宮井一郎は、『道草』論『漱石の世界』67・10、講談社において、この場面を「どんなに淋しくとも、人間はおのれの道を行くよりほかに生きる途はないという、健三の絶望に似た孤独の諦念を、その底にたたえて、「吐き出す様に苦々し」い口調で語ったのである」と指摘している。

*本稿は、一九九四年三月二十日の日文協近代部会月例報告（夏目漱石「道草」をまとめたものである）。

*本文引用は、新潮文庫『道草』（68・10、新潮社）による。